



特別
12
1077
11





利
1077
1011



賢才

二条 右大臣 兼左大臣 任太政

大臣

廿二歳 大将

六条 清是所相副 祿文可有
下向事

九月七八日比原氏野文事 弟而
清是下向事

十六日祿文奉行事

祿文十已歳
而是而文奉

源氏奉付柳枝文於西見下

十月院清茶事

新章并新啓事

十一月一日院山朋清

十二月廿日山中院畢中宮移三

乘文於

大之歲 天下諱圖

大将若松后事

二月山運殿任高侍事

皇子為山運殿

以梅臺為侍曹司事

桃園姬若為咲后後事

大将若未思離后事

大将若又於御及之為見泰高后

と出た

少將出自友臺之次奉手進大將美

密通之乘文一日後后侍中

事 云矣

秋滿中林浣事

習讀天台法文事

書書上二乘浣事

奉書上極妙浣事

奉書上林浣和紫於三乘文事

九月廿日奉法氏於肉法方出物諸事

退制之次頭弁奉見法氏誦白虹

貫日之旬事

亥水奉文法方皓中文法事

終月奉高侍送書於源氏事

有延事

十一月一日故浣山由名奉出中法事

十二月廿日中宮法八講事

結教日中文法落飾事

山戒師山度主

命婦君同出家事

廿四歲

正月奉入道文法事

左右后上法仕事

夏兩日之位中將木未會有掩顏
典事

十日許之將中將貞熊事

中將二郎若欲之少事 時八九歲

即梅右大臣是也

高侍君里居之次序之密通事

當為之日又大臣事高侍君四方見付

源氏君常下置紙事

二乘右政大臣以高侍事被謝申

太后事

賢本 以詞并 欲為卷名

^をは美らにハ三テ年れ事あり原氏ナ

二歳の九月より廿四歳の夏迄

のあはれ成りあり 秘事曰

^何神く此ハ三テ一れ松をなれ物といふ

内之をみせし樹を初小ハ三テ一

いさくありても終つありとあり

私さる本れ字彙卷にあり

坂樹 日本記 賢本 日林 俗字

秘 新文此所よりなりなりゆく海に
秘 始好中文なり 新文奉り九月十
六日の所系前のもなり 井日
名す人而そのころのゆきく
六条中見而たらきひてくふんし

おるもたははてきたりわつ 所名妙
おるもたははてきたりわつ 所名妙

くろくきこのよ
た後のきくはまらき 海身之あり
けつりくおのい 海一うそれはりせ
海と物あり

きわもつと世人も
秘 奉り上れらせ 海くわりふハまの 西見あり
そ海の幸をまにそ ありあり ありあり

世よれんをとおひかへし行わ

文のうらな

野文よそののよ 秘曰

そのちりしと

葵好くならり活てうる活りしと
てたまふ成りなり

由しむらうしと

活れうしとおひ活りしと
とまふと物りなりとおひしと

行へ 物のきふあしむりしと

高実物なりしと活りしと
おひしとありしと活りなり

よ活つのおし成

秘 万子成きしと活て下活りなり

秘 原ふい活きなりしと貪著の心や都

のり妙なりし成きと活りしと
きりて一きらふ伴摺へしなり
し人の用と成りなり

ひらみらに

花並踏やま

同去一まらたおひきさくめらるる

おやそひてそあり行れいふことよれ
ありれと

^何おふなるありれと毎よなるありれと

おとたといふこと不用因魅流清

時親子女王おまへるありりり

おれおまへ おまへ女王 のと海と

とにすふこゆと

世あられい海しこりりありす

じりれおまへなるありやあふん

おまへの浦と

とらりのうらりけれうらり

うらりぬ松れおまへるや

おまへ女おまへ子式る重明親王女

兼平十六年おまへ言帰京とけ天曆

二年十二月入内同三年三月おまへ

秘

生記子女と母を為母宮系向侍
勢之村母女流被お付雖換け例
延長以母近代の事なれハ例
とふなげきもいふは地流今古
准據なる事ハ不載
河海に田馳流の流村記子女との
とといひりけ例ゆれは延長以母
の事なれハ例よ母さるハ古の地流
れ例さるハ例とになげれ

とハさる

事

い事例ありと事ともその時れ
とりつてと記えハ例なり因
馳流流村上の流女記子母宮
としてさるは母母の微子
親女 女流の事してさる行
事あり 見何 けと記さるあり成
例ありとさる

記

村上流女記子内親王天延三

祇宮に立てて下向する御入付侍母
御子女と重明親と女をいて今御後
月三の御後には六条の御息下式御子
女になすへて御後ハニ御あり
され小母子ありいて下向の御
なり御ありてくハソウ御あり
私河よソウも御ありなれとい
さうかりりおや親多にソウも親
子女の御れ御例とい貴下あ

おとになりて御れハ御あり

ソウおと

いとみくれらい

秘新宮 十

おしつげて

ころりてあり

られ世はゆいいなれ

おと

ちの若きす

私 葵巻にはいふあり源の心

いせうりこりありハ

私 これと葵巻には空と新花と花
てりハいふありひふれりこりこり
ておんせぬとありこり又いふ
ハ葵のさうりこりこりこり

たいりーぬんりハ

私 息下り源よ美西の事ヤ

人ハ心つきり

私 息下り源ハ人ハ源

私源の心よハ源小端をありこり
みてハ又わりぬいふこり
まらりー又貪着の心といこり
こりこりや心けりこりぬすあり
いふこりハ息下りのこりこり源ハ美西
ふまりーまらりこりこりこり
家ハてりこり地よ美西あり
こりこりの心よハ

六条宮秘の由あり

六条宮秘の由あり
六条宮秘の由あり
秘日

大将殿えきありぬるす

秘
まのいふよゆよなり

ゆきよゆきよゆきよ

秘
け野宮へはたやとくおんすくき

りありすしゆあり

私野宮へ興計のありし由あり

へはまのいひておんすくき

りありぬるす

後のりありぬるす

秘
相尋帝

秘
け巻の末よ崩落す

れありぬるす
秘日

けりありぬるす

秘
内息宗のありぬるす

ありぬるす

おのーおうして

まのうれとまのそおひいり

九月七日なれハ

源のおうーらるる

十六日れきりらうれーらるり時を又

歌なりー

十六日に歌うさうりらるる

歌うさうりハ九月十日由家おれ

私之身ありハ十日のりなりハれ

女々々

此身ありハなりあうーハ周

とく

たらあうと

あうさるよりし連てー

いてやハハ 此身ありの心

我れのおうとーあうと

いてやさうれハあうさう

川裡我のー 又及川裡

秘

不及引奇圖書同

私語てやとハハとおこすありおのひ

こわてありハハはおのひとこふ

れんし下すうり

むきれいさ

埋痛れうりもれわうりしハハおのひ

或抄西院。ありふれぬのやうなる

とふりし

まのうりりの

秘

きハハのうりりあまてハハ源氏

ハハ源氏

うりりハハ源氏

私足りあり源のおのひハハ源氏

みらすうりれぬをハハ源氏

秋れハハ源氏

或抄西院に始れハハ源氏

ハハ源氏ハハ源氏

とあり 宗長 西けし

そのふりれりありこ葉と大垣にて
延喜式よ大嘗宮宮元の垣ハ極葉る垣
りしそあり秋宮の野宮とこれ
に准すくー一 弁日
野宮のふく大嘗宮の垣と葉よ
てすりりー延喜式よみえりあり
襖のふりあり大垣ハ極りあり
の垣あり。
いふととありあり

秘

秘

式抄南にてありくく下よそのあり
る也
くあり本れりあり居
くありいとくあり人さとし本也
只又皮のほきり本紙いあり
くあり本れ屋仁徳天皇是れ四時
ありあり
はほきりあり本紙より一河海の

次説と角一

私考居 又衛門 くり居矣

字成くことりま

神考よりりも天地のり成人と

本入すりゆし

かりぐりりり

秘 神し安せ 昇日

りりりり

ゆきいりりりりりりりりり

亭なるくエあいかのりりりり

なりあり

神代るるれものりり

私 伊勢新宮寮

頭一人 四位五位殿上人 若 諸 更 任

脚先 大少 厨 大が 相当正六位下

けりりりりりりりりりりりり

ひりりりりりりりり

火焼屋 炬舎 火爐 順和名

脚鋪 こま ちや

又云コヤ

火炬ヒキヤ小子コラハ二人

山城國葛野郡

の秦氏の童女アハ成ナリりりり延ノビ成ナリ成ナリにニみミらラり

并

花鳥に委し

秘去宮にもあり

月不分明

野宮のハ津膳と云々

しつ月成へ

あにものおとくき人

赤息下れ心仲と云れあり

みけてほれあふれふりりり

ゆりりり

物のふれさるき

内秘の方なり西ハみか津子のま

なれりりり

たらくれて

ほし

あふれハみかやき

上秘れ詞よりのしりぬらのは

ありあり 秘日

たゞし一語も言ひぬにもあはら

ぬくよある一語もあはら

いともの一と

ちと版立をせ 原の公あり

うりやうれあり

^秘原の詞 井岡

私養の巻に始にし由ありやむれ

さし世をぬとあり又も子なりとて

ハをきく一きゆふなりあつ

なり

とありぬたハ

式抄云引歌もあはれれと云説われ

とてその由にしれぬくの成神

るれと一りなれハ一めれかとは

いふあり

^秘あまの物語の只れ事しにまあのみ

とて詞あり

何
往連

四百一

佛經

四半本記

人々

此息正其女房を以て

い希この人あを

此息正其女房を以て

あお母さん

祇堂此女房を以て

私にわこの人あとい祇堂を以て

あお母さん

いもとこの人あとい

あに親にして

あんとあの子も

き事として

あといこの人あとい

あといこの人あとい

あといこの人あとい

あといこの人あとい

あといこの人あとい

月よりれはより成

いよりれとて成なるふりしひはあ

とて成つれ程さうひはさく

まに中絶なれはさくゆふゆふはひ

よとれなり

さう成つてさう

海のありてさうなり

月はれはさくといふさくさく

いふれ成のさくありさくさく

ありたり成つてさくの事なりしひ

成つてさくさくのさくさく

さくのさくさくさくさく

さくさくさくさくさく

さくさくさくさくさく

さくさくさくさく

さく

さくのさくさくさく

さくさくさくさく

秘

わんぬのうらぬる紙拂の言に
つてのうまなり 辛日

秘

ちんちん紙の山に掛葉ハ

まぐはよみそつりさわり

秘

紙のわらわ松ありんたれハ

うらぬあまそしハあま

私松ありんたれ川よ不及ん 辛秘

二角なりし物

いれともこしゆよりれ

秘

ちんちん紙の山に掛葉ハ

秘

川あり

辛

ちんちん紙の山に掛葉ハ

まぐはよみそつりさわり

私松ありんたれ川よ不及ん

二角なりし物

いれともこしゆよりれ

ちんちん紙の山に掛葉ハ

中五下

うきうきの酒し

秋の風ハきりけ敷もなれ秋はいよ

まらうておれり櫛を

あつくハきりけ敷もなれ秋は

秋 三櫛のふもて秋はきりけ敷

秋の風ハきりけ敷もなれ秋は

あつてきりけ敷もなれ秋は

のふあり思ひなげきありきりけ敷

いよまきりけ敷もなれ秋は

なまの風し

秋の風ハきりけ敷もなれ秋は

あつてきりけ敷もなれ秋は

り、庵ハ三櫛ハ山もなれ秋は

えんのふあり思ひなげきあり

いよまきりけ敷もなれ秋は

なまの風し

秋の風ハ三櫛のふもて秋は

あつてきりけ敷もなれ秋は

之猫のふらふゆる人よも
ふらゆる人もあじしとおしハ
をを原しめ子うあふあとおくは柳葉乃
香成あふこもりてしとれ

は未通女万 少女日純し通女 少女

女々集をくおよみそくくめ柳葉れ

陰道源成やハ人れとあてきん

柳葉れ香成くくくくく

八十氏くを柳のせりりり

私一首畧之

并柳葉れ香とくくくくく

ふあや 秘日

松玄田ふたれあよいよはゆてれ
といひてあふめくくくく
とよほつたれとくくくく
りりりりりりりりりりり
と原のせりハ柳の葉の
とくくくくくく柳乃香成も

なつゝくしてとめては海りあはれ
たもゝろきとせななるく
たぬさくはなひもつりーはれと
神幸あかれは俾あるまじ
みすつりハ川きしてうけーにい
うりて

原のふぬしみたのうらへも念願す
なもゝくハとれせよまぢといはれ
しはせーハ鴨とつりうひー

女といふあり

母ふまらし

たれより原のふく

人をもさひさぬよ

人といふ言すあこまひさぬにさひは

ーははさーさあくしてこし切

おらゝれはとく

佛身あ的事

は公おらり

源の我神(一) 埋置(二) なる(三) 事(四)

ふふそやまますありて

^秘 きのりよなり 結ひ(一) 事(二) 日(三)

あ(一) き(二) 出(三) 女(四) 人(五) 也(六)

^秘 け程中(一) 絶(二) 方(三) 由(四) 事(五) 事(六) 日(七)

ま(一) こと(二) ひ(三) ま(四) 事(五)

公(一) よ(二) け(三) たり(四) 結(五) ぬ(六)

これ(一) ま(二) して(三) 源(四) の(五) 清(六) る(七) 女(八) 也(九)

女(一) 事(二) 事(三) 日(四) 事(五)

此(一) 身(二) 所(三) の(四) 公(五) 事(六)

よ(一) け(二) 公(三) 事(四) 日(五) 事(六)

源(一) の(二) 公(三) よ(四) け(五) たり(六) 結(七) ぬ(八) と(九) 事(一〇) 日(一一)

此(一) 身(二) 所(三) 也(四) 事(五) 事(六) 日(七) 事(八)

れ(一) 公(二) 事(三) 日(四) 事(五) 事(六)

お(一) け(二) 事(三) 日(四) 事(五)

源(一) の(二) 押(三) ぬ(四) 事(五) 事(六) 日(七)

月(一) 事(二) 入(三) る(四) 女(五) 也(六)

上(一) 此(二) 詞(三) よ(四) 事(五) 事(六) 日(七) 事(八)

目暮とありしにありき
うみ笑し給よ

原の山鳥も然うむらなり

ほつさもまきわー

山鳥もれぬよほらりらうみ

あういよてまきわー

無限心中不平事

一宵清話又成空 面白き給へ

わうくー

^秘 山をり成治定志給よ

されりし

^秘 山公のひくし

松葉山鳥もれぬ中へ新ふはあり

すうあまのうけうむやれあり下四

と定ぬ給ひしとけはわりくと治

定志ありやされよし又原のおりて

おのーとゆれとあれは多の方一山公

のひくむらくれ成山鳥もれ公也

多うりりゆよん人とおひ
よほしにさうりりあるいお
といみれおちり
夏上れりり人さち
葵巻に夏上人とも朝夕の露よき
あかり成そのはれやくにありす
とあるはりりり

夜のくすまひ
野言れりりりり

えんなりりりりりりり
或抄由説に我りりりりり
てりりりりりりりりり
れそのりりりりりりりり
のりりりりりりりりり
おもりのりりりりりりり
源流息に手よんありりりり
なりりりり草子地
しきりにけりりりりりりり

三秋未暝く候立東将明く天別
緒依く之情忠誓切く之恨遭逢
期時とさうにほかりいさせらり
なりとらり

私物別は隠い下の京幸時名乃感
概なり成さりなりぬた原由息あふ
に心ありにふたに心ふつてつらう
て久き中こつて品と成くわ
うれんこふ名おらつてふ成

ほろてみろ一海とにありれあき
くすくすともれらりれあき
一

あろきれわれハいばき露のうきを
はらふふまぬ林のきくれ
けほかりわらりやうゆる曙の光く
しられあはれをきみぬくは成は時れ
さる海おひかりてみろ一
業平朝臣のうりれ使よて成るわ

ことごとく尊大うらむことたたりありあり
まのわりはふおのいりまゝにうらむれ
あらしこれなるはうらむる露の
おぼえてうらむる別せはちや書
大庭の寸心おそる然中腸断是秋天
私に別はきされあつてまゝにうらむりて
みすこゝれ對面よりなり浅らま
まゝぬ林のやとにうらむる書る
ぬかうらむる

松江にれがれしうらむる
私は糸糸織よしにちかむらりけさ
うらむるうらむる
うらむるうらむる
うらむるうらむる
もゆぬよや
水原抄にハ申くともゆぬといふ詞
ゆらゆらのをちかむる浅らま
は糸糸と書るゆらゆらおの
ゆらゆらと書るゆらゆら一人の

亦きよしゆりいれし小原氏君乃
あハニそありて西息お縁一うりよ
なりうへいり葉つらあー野うの
産のこーすーわあさらうりいん
うじうら虫れらこーして思ふ
なまこくうありしこーして
うれう成はしこーしてあさいゆ
にハいらわう秀逸もこーしてあ
あさふれとあまやううぬは口
い

三成中しくとゆあといハ

^秘あやゆらう

あこれけらわいこーうやう物
てハいらわう秀逸もいそ
せりあまをたれといこ
妙はあり

長中

あやゆらう林のりれとあ
あかきくおせくれ
けあも原氏のあともあり

原抄云源氏二そはくけてらみ給り
而息二所の迄方なりけりといふ所望
ゆしてわりあきし由んまといふこと
ふもとゆふぬとあれは迄方あれも
こそあれ不可及疑點

是ハ而息二所の方なるを——源氏の奇
ありハ二そはくけてらみ給りといふ給
らんし物をくれば柳之あつさば柳れ
とあつた秋の別と對せられたる

滅子贈答といふべきやゆれ御且
その所くはりハ人なりあぬあれ
きははらきく又われのあしきとい
ひくはみ給りけりハお母と秋の
われもあつたといふことありあつ
たり離るるといふことの中はくた
ゆりといふやうきくハお母
ゆれはるこのをより下成といふ
去りゆりゆりのら乃あきつり成

まのくなく
け別ハ我心くなく
解れ感のりなりよなり
のくありきしハおとてにいんさるおと
三海一 龍島にみさり
松中くさそとゆぬちとくさるお
き初し武ハさりなりなり
さやうなり月のもも又ハさるお
榮なりのおもくくは下とて作者の

秀逸とみし事ハあり
さしなりさりれおと
しあり人よさり
あしきなり
くしれ事おんれ

これハ源の心成り
源の心け程さくあり
そのゆよさるなり
いささのれとぬ梅ありあり

おもしろいことなすて
さうに人なすてあり

みらの母といふ露の

おもしろく見えてあり

女もえん心はよす

おもしろい心又思ふ

あやまらうもさうへく

さうう人さう原れさう

あつさあれさうのさう

しつう

なみさうみあり

まゆぬんれ

あれもあやゆらもさう

さうさうの

あつさ

原れ

あつさ

なつさのさうさうあり

あつてきつからぬ

昔坊のなつなり終てのちるやうに
源なりとにきき終るに誠よあるやうに
幸しくさしてそれゆゑのつれづれと
もみかよとあつたりそれとあつた
いなりしてとあつたりさしてあつた
必定くさあつたりはなれは源のきけ
いなりゆゑあつたりとあつたりと
あつたりになつたりとあつたりとあつたの

あつていぬとあつたりとあつたりとあつたりと
あつたりとあつたりとあつたりとあつたりと

研宮の

^秘 好なり

あつたりとあつたりと

^秘 不定なり

松母言とあつたりとあつたりとあつたりと
不定なりとあつたりとあつたりとあつたりと
あつたりとあつたりとあつたりとあつたりと

世人ハレハ

^秘 亦々いひて

私ハ良初倒之ハ卷々

と記述あり

私倒る記すも

れくたりあり

ありしなり

伊まも人よ

^辛 世人の

つらり 秘曰

^秘 成つてみる

人の力ハ

ハなふし

たり成る

たり

人よ

十六日

^秘 新

今棄身なりと日清ありと物使とは
河原ゆて侍なりてぬ泰す^{キリッ}と
送使ハ伊琨ゆてとていひなり
て上流の時ち場後よすて
申ゆていり下名のりてと泰
聞了れはまきこりていりなり
減りてありてなりなり
^并花鳥にくり
きぬらんこらめ

唐云なりと人のいり物とそれなり
ぬんといりて
きいなりけり

むろしき事なりと名なりと人
^秘泣ありと人なりと人のいりなり
唐云ありと人なりと人なり
何しき事なりと人なりと人なり
はてはと人なりと人なり

半と和折ハ移る

何乃ううふふふふふふふふ

^秘 曰右居乃詞

不定感事トしてハあり一実況ありト

れりよ

あうううううう

一日乃志乃うううううう

くらたうううううううううううう

とととととととと

曰府勢憤あせさうれさゆ

心一うううう

其事うううううううううう

一衆の志乃ううう

志乃うううううううううう

ふれくうううううううううう

とととととととと

志乃若ハ何ゆをううう

や井居れうううううううう

しる事人といひあり

秘 内大臣御

公ねさあり

や井馬とさうて云

わきしをゆかりてさうありとれ

我子乃心ねさなまかともうさうあり

れらり物まかとも

西いなみまよ

氣 さあむい飛之由久れともこのまら

活よ

かきり物まかみとれいはいさいひとめ

秘 醜白し女康子内親と事河海あり

河 丞相欲贖子累陽石河公孫誅 漢書

康子内親し 延喜皇女村上帝れ清時

弘徽殿よりあり海よりふ九条の在

丞相忍てまの世行りうう後よハ河

ふれて出入活きり内院太政大臣 三季

母之 世継

又左京左大臣道雅密通市沙高苗子
三條院皇女母后嬪子

きく夫と志すはあつ人

秘

媒あつものなしてあつハ常れり

いづきひま

又何とえぶか次をれひまうて
いとや

これハ何をされぬらあつ

高のれもてなり

大文のれふあつ

ふらまのれつ

あつ

たつ

け服あつ

詞

いづか人として

おれは世上の事といふ
程めづれる事なれどたりいふとめれん
是ハタテ事なれどもいふと
とれうとらあけく
内倉屋の陳とらわらまハりしと
らにひ合あけく
り一志りいふ事
内倉屋の初く
私事乃様神内倉屋の持事と
あら

心をこめ

心を解りてはつね事と

人に何とせりこころいあつね事と

いふんとくそれと心をわらし

今ういふ事

内倉屋の方一や并れ居るといふ

一と

まの面公れ

うこめらひさわりと

秘

先れと多らとて居る

とて中あさう終一く

や井乃房とていしうたのいお

一うくの中あも先のたまの

ふさかうよれあひらまう一とて

何らい一や大納を致

秘

按察大納をてや井乃房終文へ

非

と云井乃房代母按察大納の中あ

とてわのよよとて居るといふ

はてしなくとてとて人たすらひ

夕身とてあ人よいとくねりて

女御さうりの事とていせな

たうまてい

秘

女御后よりあ事とてい

うらるを致行て

旧身乃さ海へ色く姫若よれ

そういふとてい

いりていふ

これゆへは姫君とりてまこころなむせう
ふきりしこころも

ゆりきりし

内府の御代も多からむこと方人
ての御代

まはれしとくおとえと申す

大文此事といふと御とハえと

申すをたると君れ

^秘夕霧とハれ大切と思ひのふと

まきけなうとあよおま事一のちうふ

大文乃由ゆよハ内大臣のあはし

乃やうよ高ふも御代わりとてか

まき

おしりありいふり思ひのふ事

^秘内大臣ハは姫君とハ思ふはとて

ゆいと家しとく御代わりとて

一物とてえす

ねたまれのてうつとてう

あつてこそ去交（此中）をいふ
後（内）右（内）打（打）とていふ
こゝろをいふとていふ人（人）のいふこと
君（君）のいふこと

^秘去交（去交）とていふこと
雖（雖）人（人）をいふこと

あつてこそいふこと
うた（うた）とていふこと

大交（大交）のいふこと

これ（これ）一（一）つとていふこと
なり（なり）とていふこと

いふこと

や（や）とていふこと
さ（さ）とていふこと

いふこと
いふこと

とく

御公の御らとせむしはなりの御
ていり

大いよとてふに田下のおまゝ根行
あよ此所公れ中とせとまらぬ
うつり田下居の後まゝ行くとし
弟お代し

秘

大宮れ所公らと田下居よみをせ
つとていふと

くつらつらんとせとて大されま

田下居の後まゝと大宮れ所
一東も人せけりて

一日田下居とあり河ひ流し一時的
つとていふと

夕ほつとていふとありたなれ

弟お代し

宮まゝいふとあり一は海らつとていふ
つとていふと大まれ海らけり

いふまじきよはを井たるの事なるは
をゆきよくくわつしゆ
河海よは交まひはせむきすまひり

注：是非不知トアリ

いふにふり心のねこれ

秘 大宮乃詞

ゆけたるさ

ちるさゆりちるとふ

心そ志ありてや

こゝろ知れぬやよ

いよゝ終り事乃

秘 夕雲の心

何事しりゆらん

秘 夕雲乃辭

三日月なりや

孝の詞

何れよんをりて

たまの心よ夕雲と公を

海よりぬき

秘 大宮河

と事よひひけり

はくもえのけりよ夕雲といふあり
まふれんこり

とあしるる事

夕雲は事よ今もみかよりとこり
かんとあきとよ

物よりあしるる事

夕雲は何をも人いまは行はぬと
秘ふぬぬらやうなれと

夕雲乃秘らるる事と公にけり
ぬ

あつらうとよひけり

中障子

夕雲を井はるるのたはすらふ事
中障子とぬ

とあしるる事

夕雲

風乃竹は海らそりて

風生竹夜窓同卧月照松臺上行

おほききりゆるらにそ

や井居れん

や井れらるそりらとやと

^秘これらり名とらり

^可第少らるや井れ居そらとや

これきぬおのうらりかきん

^秘川舟の目

さう公りしるまははあまははとさそ

^秘られハ姫若れはらりととあてて

さる若君の中乃はうとあけ

ぬめれとらよの路

こゆ夜やゆらり

^秘や井の居れめのとこ

^并先れとこや井の居れめのとこ

ひとありとこや井の居れめのとこ

秘 色井の鳥の心

何の形もあつたといふこと

さういふこと思ひてふかきりかき
あつたかきぬ

あつたかきぬ

秘 孝子伝

色井の鳥の心

かきぬの音とせ

色

秘 孝子伝
さよ中よあつたかきぬの心

秘 冠者君の心
乃や井の鳥と我との心

秘 弁 自面よりあつたかきぬの心
夕雲よりあつたかきぬの心

秘 舟 西抄ノ義を然一

身たるもーみけりうれと

河 大うこれ林のさうといふやうさう萩吹

風う海河ハ身ありむ

六指 明くれも身ありーみきふ林風と

秘 色たうさう押し思ひけり

川音吹くれハ身ありー音乃結白

萩の上風ハ身けりさきけり身とけり

伴けりうきぬ随一面也

舟

川音秘ニ因一

宮乃おもうよかちりて

夕霧ハ大宮乃流河より倉庫りて

秘多ハ秘也一

しりれかた

三條文として夕霧れおまうさう

女さうゆれ行一幸の

や井乃居れ公内本居れおひさ

返とらうーくのも思ふ

家方やういふ人やらせぬ人
我方れうあ人の思ふ人やらせぬ人
なまや井房れいふ人
なまやうらういふ人

夕霧の事とや井房の思ふ

又か^秘いふ人やらせぬ人

かへういふ人やらせぬ人

いふ人やらせぬ人

や井房の思ふ人の事とや

おしなひう人やらせぬ人

いふ人やらせぬ人の事とや

いふ人やらせぬ人の事とや

いふ人やらせぬ人の事とや

いふ人やらせぬ人の事とや

おしなひの思ふ人

いふ人やらせぬ人の事とや

いふ人やらせぬ人の事とや

いふ人

わ乃うゝたはかゝる事ありとせしむるを
秘 云并れ居の徒母之

大いしむるしきしをきりしあはく

四右居乃様端ありしきよと何し
きぬく

中宮乃を我りひとせしむる事あり
女御れ世中

秘 弘き後乃之右さくしを今よ
あよつまよしししんあのはしをす

乃乃とせしむるしきよと何し
なりし事也

乃とせしむるしきよと何し

秘 之右しをけしむる事あり
れくけうしはありし事あり

并 弘き後乃之右さくしを今よ
弘き後乃之右さくしを今よ

くして女御と何しを程朱何なり
心ゆらひせし

何れも女房と結ぶの事なかり
ふれあふ事

ありんく

^并四右衛門の女御は若くして今もや井の
房と俄よき一語も人言は
へりおまひ女御と復せよ

よき女御と復せよ

^秘色井房とよき女御と
よき女御と

よき女御と復せよ

弘徽殿はよき女御と
よき女御と

よき女御と復せよ

よき女御と復せよ

よき女御と復せよ

よき女御と復せよ

よき女御と復せよ

よき女御と復せよ

秘
四右后親

四右下乃詞女御の由里を徒然人
と女御へり居く

御方若きうて

や井原とくい居らん事といは出
あふた

いとゆりしむふよふふふふ

さうーくさうーくさうーく不妻も去れ

弁
ゆりーくさうーくさうーくさうーく

況く無益れ

私支抄ノ義と月一ー但河我義

何
たニ注入

觸^{サツ}礼記 持牲或祝人の之故ゆー

とゆりーきこりしとみ事ありき

又ハゆりーらと云ゆれくともは

と立音通とらあてとて井原秘祝を

乾
觸乃字とぶりー

とゆりーきこりしとけいりはとゆり

託内則篇よき事よれ又母よつらゆつら
時方よぐと世の一二冠者若くは学問で
文母よつらゆつら世の礼義と知識を
にけきききり一と方よきことゆんすも
るくことゆきききききききききききき
やうきききききききききききききききき

秘 大宮へ 無教へ

をとりまのせきけりか

秘 葵よき

や(内をけりくよおり)よりふた文
の句へ

をていへき

や井原の半ゆきみありは
ふれまふ事へ

秘 くらかきこゆりき
内をけりき事や

公よけりき思ふは了る事ハ

秘

一陽をうらりく思ひのがしんて
まゝくはくゆくしあり視とせ
公乃命てなまはれし母は思ふと
うゝとせ

少く命てし母は思ふ

秘

少く思ふてし母は思ふ
うらふはくうらり母は思ふ

秘

女御里にては事く

くゆ事ハ 何若

井

くはくしとむ ね屋とら

何くさぬよ

くくみ人ともさせ

秘

そ井屋と人しあり

かきさくし母らよこれハ

秘

大文ノ詞 大文ノ心

私内大臣乃命はれとあぬあおん
らまほしよまゝしめま事とる
りし事との話くぬく何す

口行りおぼなされてといふそとる大
文乃の心

人乃の心しそらうり物よのあまこと

二まらりさぬくよえん大宮乃心
何

ふくたさうり心とまこと

秘 夕常を井乃心

かやうり事しそと思ひらり多るが
と海しきさるる心

人乃としそらうり心

さて又夕常を井乃心乃の心

あま肉大居れ物乃の心と分り

く大文のさうりれやうよの思つて

うやうよさうりくくくくくくくくく

秘 親王れ中としてしぬの心と分り

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

お終らりしりやふきし事と

田舎のたうたふきいりやふきいり

とくのこいしりしり

わしりしりしりしりしり

とくしりしりしりしり

^秘一月十三日つり大文よふきいり

み合てまけし事

私しりしりしりしり

とくしりしりしり

心乃たやふきいり

夕穿乃内大屋よふきいり

ゆき思いてくれ給や

たふし細き紅漆休つ後大文乃表

^秘皆大文乃由縁

みよのしり

大屋のお八つり屋中(八はてき入

行いぬ)

たふし事 持中ぬ

秘 是ハ内倉屋の兄弟之別腹之

有と云ふ所也

故撰政のときとのまゝに大文の継母
をれといへん公の世も

うれは

た忠持控中納てれ中も事りては
中よあり

大の者ふうがふかひき

秘 夕穿

大宮乃法公さ

秘 夕穿一人なりけり

多二乃ひあ若と

秘 夕穿よつては中井持屋と大切

思ひあふく手折

かくて

秘 夕穿よひき

殿ハ早れかた内よ事ありて夕穿

内倉屋

秘

内大臣の事内河ありて又は西に
とせんとせ

此も用えたりと多きなり也 井日

よふひなふ事とささるんひあて
さそりやら

秘

是らありたるぬれ心よ田ひあふ

秘

内大臣の心れ中くかくて又第

てとささるんひあてはたがともみ

口橋

人の心はよのすしものあて

夕雲れ官位うとありては

心

秘

夕雲れ心とささるんひあて

とありたりとささるんひあて

今さらせりともみ

せいりんきんとき

何
制諫

宮とくし何うくらふ

草子地へ

大まれさとうりよれまじ成へしと

思ふ心り口右臣の海腹女あうこれ

りふ

うさそりこいふ

口右臣の心方へたまへし女出御まふ

ふしれと面うししや井れ馬次

くみとあまふ

くしつなかりときわ

私
いふひなまこといふうあうまて四

臣の心とけり

草子地の察してまきつ御はは

宮乃西あしにて

井
大まらりや井居へし

秘
日殿うし者よままのうあま

なまのよし

おしそくしめし新いあ

又の初之田を居しそちま(痛心)初め

や井鷹ハヨリ公ヨシヨリ人知流らん

いま一ふひ野西ヨリヨリヤ

いとヨリヨリヨリヨリヨリヨリ

此をヨリヨリヨリヨリヨリヨリ

ヨリヨリ

十字よおしおしヨリヨリ

や井れ居しヨリヨリヨリヨリヨリ

さあつヨリヨリ

かみなりふ見しヨリヨリヨリヨリ

^秘こりヨリヨリヨリヨリヨリヨリ

く大やうなるん

^可こりヨリヨリヨリヨリヨリヨリ

子あれをヨリヨリヨリヨリ

秘ノ説可用之

かたりきげせ

大宮の御人

みくらきまのりらとん

ふまれりまこてや井屋敷

未とんらんまこま事とんまけき

ゆりあま

らららまやのりらねんとまにけ

うすくまのりらひひん

とんまのりらねんまのりら

せの田のりらとんま

姫君の御人

まらねんまのりらまのりら

とんまのりらとんまのりら

まのりらとんま

おとこ君の御人とまおね

夕雲れ乳母

おねまのりら

まのりらとんまのりら

まのりらとんまのりら

ふしふ事く

殿はとさぬよきなりなり事

又内左衛門はいつれの人よ縁とせよん

とれまよとせよ何のふまひ

ら午の足

ふしふ事く

色井原乃ゆよと

いてはあつてきい斗か

秘 大文句く

いとわおけけり

秘 幸ね衣句く夕宵と何なゆりまき

けふわ若や人よととわ

秘 若若我若あねく夫はよの句もハ

あらの字で然え

再 幸相若句く夕宵此 永若え

私若若も若え

公やまーれまに

夕宵と思ひ何まつりあふらば

なや海もままじい海に
まよひうらりよ入船て

夕霧乃れぬわてや井底とらふ
し

人のうらり人もまじき時しと

昔ふもたふこれ時とあまの
時といふまよきわの時といふ

いられと

夕霧れぬ人の事おまへ

宮よまろくきこいぬんわ

大まも何しり波三つりや
房よ夕霧と何せむら

おと乃いれいとけりれん

夕霧の河内ち居り事や

いられ思ひ届きぬ

サハし又さなれとむい人とあり
松さうんさそてるといふ
さいまことら海まじや

あつてすうひまありぬいりばる

此程ぬいり人もあつてありつる地と梅

あふ

海ろそさそあつめ

秘

や井馬河く

あつてはありあんや

又夕雲がくあつて

とこりりあつてあつ

や井馬河のさ海く

あつてあつてあつて

秘

あつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

雲井房の内を居よとらしてあし
まふさゆい

あもさくしれりしをふらぬよふさ
うへに

先ハ夕雲れぬくそとてあはれさ
りれハひさしう年ハ一向よき
そなりし思ひうわてや井房之を
とらとひさしうねい
夕雲れく年ハ思ひま

所外れとすいあて

秘 夜井房の内を居よとらしてあし

きくきとんそけし高きし世行あ事
よてハ

秘 け後神と交れきりねいありあ
ハきし事とら

いてわうそとけり世うるとお
や井房のゆめとれい
殿のおあしの子あ事ハ

川右の事とこれハ三ていふぬ終
又梅家大細云又実母とこれ出らん
事とと

先てこゝとておのゝめれた位とせよ

何 や升と毎く

三條の上れおのとし冠者若とては
関六位とて冠者といふとて
ハ冠者といふ

心 い いまゝいぬ位よあゝさりにはありて位と

子藏ハ五位か——上よとて——約り
とて世ハ夫婦の契といふ

毎この屏風はうらうら

夕雲とてや升房とおはなり屏風
うらにてう乳母らといふとて

何れとてうらうら

夕雲とてやうらうらうらとて
これきこゝとて

夕雲の詞や升房よといふとて

夕穿

くれき井れ海一わらう神のきよはらひ
しりややいひ一かりてま

秘

夕穿のきよ 因心何い

神の清しりき源れおま

色一りきりや

延命井

いろくま乃らうまほと風う海い

うふれあけりちれえり

毛

いふそあきり中のあんと冠

君れ何いこりあともみ活うよ

秘

唯君れ延命

かくさくくよ人のもてはらひ

いひお母よそあうりあうと

殿りあまともりきりわり活ひぬ

内古居りまておりせんとして

しりれあ

しりあ

夕穿れ我方

はらう海いりりにて

や井屋の内を居りてあつた

まの心をけきは

夕雲乃心

移るぬやうにて

大まればおろしと夕雲乃心

あつた屋の中にてうらなぬ

うらなぬぬぬぬ

ほなきい膝うらぬ

人もこゝろくちあふぬぬぬ

まきとまき方ハいふまにたふす

孝同くまふあつた

乃乃ほと人あつた

何人あつたの道ゆらうにたて

こゝといひていさぬん

私不及川あ

あつたこほりうめていさと分明とれ

うらなぬぬぬぬ

秘 東氣西向くまふあつた

大敵よハヒト一カをらハヒト

^秘源の事ハヒト一カをらハヒト

身とあハヒト一カ

同云傳氏ハヒト一カ

一節ハヒト一カ

おほヒト一カ

人ハヒト一カ

由流ハヒト一カ

よりおヒト一カ

カヒト一カ

なふヒト一カ

^秘させり経言ハヒト一カ

いそ記せさ坊ハヒト一カ

紫上ハヒト一カ

身人ハヒト一カ

^秘ヒト一カ

由りありハヒト一カ

身人ハヒト一カ

よみよハスミナキ事トモ

二条院の事

中宮よりととよハキもはるの事

秋好よりしゆりきくをばふ

過よりよめせらるるしゆりて

後園よりりてみ節停心より

秘 心 何
まの節やれ後園くくくくはるはるありて
てきくくくくくくくく

為りて女院前依後園待停心者

本朝月令曰五節并者淨沙る春之

新制也相傳曰天皇御吉野宮日暮

彈琴有與俄尔之間前岫之下雲氣

忽起疑如高唐神女髮髻亡心曲而舞

天曠他人不見拳袖立姿故謂之五節其

秋日乎度綿度茂色度綿左備須毛

可良多万乎多茂度迹摩妓底乎度

綿左備須毛

善相公異見内一請減立前妓負事

右臣伏見朝家立前舞妓者大壽會時立

人即皆預叙位其後年之新章命許四元
預叙位之例由是至于大章今時權貴之
家競進其女以寵此好學常之年能辭
道可闕神事多有新制令諸公卿及女博
博進之其費甚多不能堪任伏案故家弘
仁義和二代在好內寵故通令諸家擇進此
奴而以爲選納之便也諸家僥天恩不
顧糜費尺一賦破產以貢進方今聖朝
其惟薄之其防困此未好女奔卑海家之預

燕寢然則此奴教人遂有作用重案日記
昔者神女來奔未必有定數四五人伏望扶
良家女子未嫁者二人直爲五節奴其時朕
月料稍令饒給節日衣裝亦給公物若負
節不嫁經十年者即預女叙位聽令嫁
若願番侍者預之養人之列即扶其器命
如前年寬平遺議日每年五節無人進出
迫彼期日經官乞切令須云卿之中令貢人
至其子必令求貢殿上一人選召之當代其又

貞一人公卿女御依次貞之終而復始以為常
夏頃十月節召御各身在前令用意

按察大納言

雲井房よし文成一

大連の緒

秘 葵上乃兄弟之是云卿ふこ

うの口をらにはらまきよ今ハ何のよ

かみ

秘

公家ふ二人多頃方二人多頃ふ上

らり上さる心さそうのとハツり

弄

同殿上人乃まいつりやうのむ御と云

河海よありそふあや一物殿上人のま

らすりハ大内られ也

且節ハ恒ノ年ハ為二人殿上多頃三人四

之代始ハ公卿二人殿上多頃三人五其

シ多頃ノ方ハ殿上人ニテ幸ラる上お御

之で五節舞姫四人幸善相云里見云新
葺今時四人云今年依為新葺云若里見
云舞二人者按案大納言云忠持之舞上之文
頃良清惟充之以上四人

私云よりきつものし八近江守あつく左中弁
あつとくきつり宿れ江守といふ左中弁ハ
本宿近江守ハ兼宿るれハ左中弁まで
近江守うげくるといふことと云れと云
るのハ交領うむうりあよ近江守まで

左中弁如し云れ

みさくめさせ行て宮へくすくして

^秘日何よみくありトアリ

^舞同五節とめはよす例ぬあや

一勅 花鳥にほせうん、方心

とれくむを免と

あまのいん乃舞好侍其人々の女
そのまひ姫ハこれより乃御長持体のも
りくた京守よりけり舞あまをらなと

いとさうしきおろきこころわろとせん

井 同惟克女ハ源氏の母と云ふ事あり

ぬらふ又多領元一助云ハ妻成る

源氏若らりてそとありて

いふに

惟克の如く 迷惑する事

大納言のほろろれけとめ

梅原大納言の女がうらうらハ妻腹

いふ

何れ人乃いほふけとせん

秘 惟克ハよりけとめ事せん

と思ひ約事と梅原大納言もかり

腹乃実子と云ふ事あり

と云ふてまう

いふておろし宮つとく

女節れ舞妓やうて宮仕とめ

一幸善お公の美乃人ふみ

私と云ふてとハゆらハせとて

うき人と田ひまわりと云を

あひまうりなるとい

かむて里まうらうしつと云

うーはまうらうし

うーやく乃人といふ

それ口のせよおきて

タとらけてん

とくしうらんと田つらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら

年うらうらうらうらうらうらうら

よふらうらうらうらうらうらうら

あまよりして清後人

清前此試ハ富の口

清前と云うて

是ハ清のあまよてれうらうらうら

私まうらうらうらうらうらうらうら

おまうらうらうらうら

いまうらうらうらうら

然るに人の心はさういふにあらざるに
あはれとて

多しと好む

うらやまの心とてさういふに
あはれとて

大かゝり

秘 夕霧の
秘始る大なる者トヤケリ

くいつて

何 若く

秘 若く 痛く 秘 夕霧の海ぬハ子向ト

とぬ

公りわき

夕霧の月をさういふに

秘 せ

かゝらハい

夕霧の

うらやま

秘 夕霧の海ぬ

つらふ公あつひ

秘 継母れ中とさげりよ同 蔭や公り

りみらまふ

ひふいともゆれよつねらりら
所さよふとや

まじむあ

推え也

屋とらりて

夕弟れそこ

なやゆ一け

秘 推え也

かろ人のいほと

秘 雲井れ屋よ似あり

いほとらそいやう

や井れ馬らりらせに

屋らぬいなよのいほと

雲井の房らりしに

たしあふと

何ゆとら

秘

夕第

心もろくし人々のありあがり
何れふ海とよまじり姫は美人もろく心さ
すき人といふはか

拾第

秘

是の世姫といふ節舞姫は事と我お
小傾しりふいさめとすすはと神
半のつうれん本綿よまきて
みでくくはまろいを何とあめは海と
そしとる姫の宮れんそく
豊皇姫ハ天照を神とす也

秘

天照を神とて宮人といふ天令舞姫と
云ふ傾まろい心とくくはとす
国延古式神名帳廿一番に若宮あり
位吉ノ内ニあり惟まへ今持は守之仍
めけり称名院
九禪抄書表紙ハとよは姫は月
く惟まへ八横津ちよとあしハ若姫
ハ位吉廿二取あり海とて内平姫
とりあわはれまろい若姫は

私是又稱名ノ説ニシテ思ハル所ニシテ
シテハ標シルニシテ物ト傾スルニシテ此ニシテ
神事ニレバ思ハル所ニシテハ往連事ヨセタ
ル

みりたまのつとれのみ

は終る

とあはらう神あり山れりまれ久

秘

き世あり思ひまあてれ
川あり同

らばけりありきり

秘

久一父をりりの心ハ何ありま

けぬき子比き

ころうとまきとあはれとあ

惟えれ女のを久常とあれと

あつぬき

るはじりき

秘

女乃たれ

けさうきふとて

秘

きしりありき

河六条ゆりうしん

をきくふらつとありほくくくくく

河梓ツキ文選

くらあしうて

夕冨れん

阿さびのんやゆりうしん

六位の袍

也節よとつきてうん

色ゆりゆき

の殿上六位聴直衣之蒙禁色雜袍之宣

名叙或説被加職事之六位職事者

禁色也

西宮抄云指貴ハ王者以下衆人所用也

古時有制臣下不用之近代五位以上昇

殿六位皆用之云

并六位禁色之色ゆりうしんハ朝服也

之只直衣ゆりうしん一禪清説云

或夕冨六位よとつきて直衣とゆりうしん

ハ別段の事ふりてさぬくはむる色ゆ
るされてしまり何さいれ上乃いぬか
つわりりりといんの色いぬり
又御洗立節よハい後も並衣とゆり
されてまりく立節よこにけけてゆり
ゆりくく

^秘立節日直衣著之余勤学治左府託
仁平元年十一月十七日美廿晴今日夕五
節系入師長末蒙聽直衣之宣方東

節系入似元西月仍不系門之筆之立
節之次上右直衣リ聽ハ夕第モ廿次並
衣リ聽ト見エ夕リ因書ニモ廿事ヨリ

みかとりわりとりめもてまりわりく
主上とりめもりて夕第力といり
ーてまりといり也

立とられまりといりハソつまりといり也

^元十一月中廿日舞下妓系入
武儀系則立怪堂

出清一富日御前試卯日童女出度唇
節會舞妓進舞

大庭乃と大納之れとハ

按察の如く推えり女之

うしり

秘

巨しこ 再日 大なりありんし 再

何

白くえ かつりし さいんを 巨たや

うなりんを 廣韻曰巨た

そのまよけよ

秘

あまのこ 地へ 何のそきと ころのた

かへ 何のそきと ころのた

首子地へ

みすしうし 押しるひり

秘

上右ハ十二三ノと 八年七ノけり

大庭

源も美月一してんね

ひり 流めと 海り行

秘

けり 一のを 節れ事

良ぬる浦へともつまつ人れぬ京の
好もゆくなまきばらとと何の事
文や一人大貳の女
何
し女ハサる女といふくあ葉上未圃女
と色くもきり未嫁女ハ事とと君し
女ハ天女ハ事く只女のお名はあ葉
よハ妻あめりつり昔とハ筑葉五節は
花散里事とよとていり
多りの日れくつて

何
十月中廿九日より始る若世ニ何れ下
のせく位上乃せも有例は日より乃
日し辰の日ハ大節ハ終の節
今れ日し
原
をよあこも神さひぬらん何まる神さき
世乃友よりいへぬれく
氣
よとあこも神さひぬらん何風をん
を思ひとてより何まる神さき人
丸弄れし女子う神さき山へつりうを

とつらふ世ふらつらふしをい原
氏れふ幸とふみつら
秘
ほくーのふ節のふつらふ
ふみつらつらふらふらふ

秘
月れはつらふらふらふ

秘
久ーくといふらふらふらふ
秘
何れれらふらふ

此方ふおほくまらふらふらふ
かーつらふらふらふらふ

急切めらふらふらふらふ

子の比れらふらふらふ
秘
うけてつらふらふらふ

秘
親の露れ神よとまらふらふ

けとひひげとらふらふらふ
のひひげれ系とらふらふらふ
うけつらふらふらふらふ
親よとらふらふらふ

秘

そのうしはよきとまらじと後句
よきとまらじ

弁

袖よきとまらじとハ源氏よきとまらじ
よきとまらじ

秘此又字よきとまらじとハ源氏

よきとまらじ

何とまらじの如くともありあて

弁

立節日よきとまらじとハ源氏よきとまらじ
よきとまらじ

かきり

唐衣

舞妓ノ装束ノ日ハ赤色唐衣白善色

唐衣辰日ハ青摺唐衣亦紐日蔭梨色

青摺ハ小正ノ事

秘

源氏若れかしかりよと辰日ハ
うれハ喜摺ノ紙よと立節若れは
よきとまらじ

辰日ハ喜とまらじとまらじハ

みく

何 青摺ノ紙とハ青ニハ蠟紙を唐紙の
又ハ布トヨめて蟬とて摺られんを
カ節乃折紙とせんは紙のあり
何れもありて用ゑん

二すこしとせよ

是乃うすくこす

人のあし海

夕雲は根えらむはカ節よ公と海

けい

けい 又柳葉紙

けい 人れうとありはみりきとせん
やとせよ

やとせよ 乃思ふくまらそとせよと成

命

何れこれにわきりてはのきいふ
よとせよとみて海とせぬ

秘

五節ハ内中少く後とてさうさう小玉
の守よりせしてさけり妙之 再日
奇後るとは後ありとてさうさうさう
ハあり 再

秘

前々東宮御京の時ハお難後有後
後退年時ハ折幸後依後これ
神事とて解服之五節ハ難後
さうさうの後さうさうさうさう
五節前後ハさうさう後とてさうさう何

乃後と河多海邊少く後とてさうさう
後ハ幸後難後七折ハ酒之仍
折は國司さうさう 再非ハ折
後をさうさうさう 再後ハさうさう
後天退出時後とてさうさう
後さうさうと下向さうさう
後て后陽案さうさうさうさう

七瀬下

難後 最太 河侯 折津 橋小嶋

依久 柰谷 幸崎 近江

又洛中七瀬者

河合一條 土御門 近衛 中津門

大炊御門

二条末

應和三平七月廿一日御託日藏人武部
丞者尔雅杖供所後物以明日令交
侍士保憲赴那波湖乃七瀬三元河
臨禱

みそ此すりきふくはさよと綱依年

神乃さけひくきく成きり

同集く伴珍文同難時よとよ

ゆりて海よりゆげり曉に森敷り

よ町鳥乃啼きりよとよ

郭么祢くなくくれ勢なきけハ草此

抱を露けりりけり

大細言りしとゆりよ

ときさつハりさとあてきりせ人せ

奏一して海門返安

左巻の巻のそれ人あつぬい

秘

亥子よ八何さるい

并

宇多御門は此巻あり

それしころうさせ

秘

且節よあわりくうい 并日

付のういなるいりまけのきんりよ

まじり

惟之女と曲約にとあふい

所りやいり海と

原乃いぬと曲約より執奏あつんと

か乃んち

秘

夕弟い

宮侍とせ人事とさうてがいあつ

弟乃回ふい

よりせしれかといわ

夕弟の弟よと早よりいあつ

こゝろは事よハ

是とや井馬と云ふ事よハ

ハ何れと云ふ事よハ

うらまへて

^秘 而井馬は事よ打てて

^秘 け舞姫の兄弟

五をらハハハ

夕穿の詞

あつと云ふハ

せうこの書は也答

な乃いと云ふ

又夕穿は詞

向うつ録り

^秘 汝クセ

^何 右人尺三寸九分

今の字といふ事よハ

一と云ふ或ハ今

いふ事よハハハ

何と云ふことか

いふことか

さういふことか

秘 ちやうどいふことか

思ふことか

さういふことか

惟えり女れ

みとりなり

秘 六位女

花井日

大勢 日けり

まのこ

秘 王公

やの字

私ヤノ字

何 日けり

あそび

秘 ちやうど

兄中 秘 私 惟えり女ト

ちくめ

秘

惟克之 又是

河

主之世継云るにうしれ花人として
正なるうしれといふうかづ心

ようぬまきわと

これらうしれと云るは

ありうしれ

惟克れま

政のうしれの意

かこるはうしれと云るは

秘

惟克れうしれと云るは

えんらうしれと云るは

世継竹取うしれと云るは

秘

母ホノ 弄日 童ヲ 穿ト 日

うしれと云るは

女節うしれと云るは

こ乃若うしれ

是らうしれと云るは

飯のよきこと人約るよ

^秘 推克源氏の心といふ

源の心と云ふは但夕霧と云ふは然

私源氏心と云ふは然

河乃入るれあり

推克れりり云云

みまいそりあり

私名りりハソと皆さら約る

私云け幾んわう

夕霧(ま)き人

やけりこまい

と云

み人の心をえやり

^秘 是らありハや井井屋の事

や井井屋の事

私云

私云此義又三抄

阿事

よハ五節れ事とありを能くしる
又節のすうとるうよてこれいそま
りといふんきこてりれ又第の
かうよ一毎いれみとありまれん惟
えれやんこし叶そ宮はく
ふいそまかへりて夕穿ハありも
ゆれよ又ゆさうこのや井の房よ
のこ心のきりてまみとよえり
行ふれといふことつ井よ文付之

一每家へこのあふハ夕穿れ
事へ

多らゆさうこてり

是よりや井房のすう

何とて

秘や井房のすうと思ふ出約り事と成

たよ三葉文も物うく思ひこ

花里を三葉の文と云れこりしわ

あふを三葉の東院へ

殿をこれ中のぬいふれ

^秘夕霧と花ちりり里は河つげのみよ
とくしつとせとせ 七日

大文乃由よれこりすくありと

これちと花交里(夕霧ときこり河
つげのみよ源の初)

ゆきまきまそくくくくくく

ゆれはよまきと乃

^秘源のゆきまきくくくく

花散里乃心いばくくくく

本乃りようくとくそ海乃

^秘夕霧と花交里とこのゆきま

くくく海乃り

花交里れくくくとくれぬ

人をあひすて

原い心となとくくく夕霧れ

思一ゆ

はくく人乃ゆくく

や井原と公よんれまの田にあり
ふいふし

公よんれまの田よ

花らりさよれ公よんれまの田よ
ふいふし

又ひいてふりかひまふん

^秘夕雲れ花安里のすよ思のふん
殿のよまふりおふれまの田よ
ふて

花安里のふらまの田よ
ふいふし

ふいふし
井原と公よ

^秘花安里のふらまの田よ
ふいふし

本丁れ花のそよふりまの田よ
ふいふし

ふゆはらうとまきい物あしとに丁ね
ひらといた

栄花物語才女云神くらまねたま
しうり程うれふゆよち河内い
く下しきりうとまきいれはま
これおがまきいりよるくいり

心乃うられうらうらとけり

夕雲れ花友里れうと色てし西
ふりうとまきいりてうけり

大宮乃うらうらと

河 清山まの氣りやをひりうとくは
しうらうらとけり

秘

いまうらうらとけりうらうら
人たかうらうらとけり

女乃うらうらとけりあまことあて
又新いぬ
花友里れうらとけり

くーらりーきなるもきり

此紙夕霧の心と筆をこれ察して

宮ハ多クこれ表

^秘夕霧の親母多ク 并日

や井尾をたむせ給夕霧一人は

用なき

みろと相りく

六位はゆりくくうりあ

はくうらまはにハかうり肉戸の家ま

ーり

夕霧は朝うりりおらまに公女一

あとしてうはも何ん

大宮乃詞

たい神とくりしれり

^秘夕霧詞

あいらし給もを公れくりしれり

園や井尾は半と思ひ何まわて

はくうらまのやりにま

うれとと

雲井尾尾此事とくたまのゆ

男ハくら行し乳まハれ人ハま

^秘大宮詞

夕霧とていさうてれみくさうにお

思よきぬよハ行しそらとれを

あふうハ六位を人乃何なゆり

夕霧の初

六位をくせしんら事をもぬ

るたうハハ何う思ひのあふんと

肉ハさういふを

美内を物うきりうれゆを

大木とておりまうまのうハ

^秘葵上又

物へててぬちやう

^秘原の紫の上乃ふふも海を

あよとのつうけをくまわりゆを

そら

秘

とく〜〜

并日

をんうの流までれいおん

并

花安里の住あり〜

花安里れぬ〜

ちく〜

多い乃ぬ〜

秘

花安里

夕常よ心運あり〜

お書一〜

秘

奏上

言をい〜

夕常れぬの〜

あ〜

ゆ〜

〜

〜

大まれ初〜

〜

右様そののまきく〜多にあり〜行〜

右様政れ事〜大文の詞

かきりおき流うけふおき〜事と

四右様と流みおきりら多〜

世人ヨノヒトをめでしよれと

つね乃人よハ何〜と世乃よれ〜

これと母交うし人ハき〜も何〜めれ

此後夕宵ハ親と〜み〜大文れ

子四右様〜恨あ〜さ海とれ〜

おひされ〜人〜

大文乃〜れ〜て〜我乃〜

ま〜と〜ぬ〜何乃〜

ま〜き〜夕宵〜れ〜

厚乃乃事〜あ〜何ら〜

と〜て〜

此い〜ら〜大敵ハ〜

源武三〜た政左下〜

あそあかろり出仕をり之但中右等
節今をりしと馬千り申あり

并一勅源氏の者大政大臣とて言ふは

乃出仕をりし事少し何よりなる

り良房少きれおしやふりけりいあ

乃事いよ

秘忠仁公也准三后ハ忠仁公りめ之あ

馬とるりり未勅也

何光仁天皇宝龜六年正月七日天皇御楊梅

院安殿設宴於五位已上既而内膳宴

進青柳馬兵り有進五位已上伏衣

馬是白馬

忠仁公覽白馬更日記所見未詳云

但宇治用白以彼例覽之然者勿論

白馬者引諸院宮之故忠仁公依蒙

准三后宣旨被覽之歟宇治用白同

之源氏太政大臣同就准三宮覽

者也

准后事 太皇太后宮 皇太后宮 皇
后宮廿三ニソラ(一)准三后ト云セ

執政唯三宮例

忠仁公 貞觀十三年四月十日為准三宮

昭宣公 元慶六年二月一日准三宮一如故事

仁和四年二月十九日使賜
之依前固辭不受

貞信公 天慶二年二月一日准三宮一如貞觀

故事同九年九月廿日辭不賜忠義公

貞元二年三月四日准三宮

東三條用白兼家公 寛和二年六月廿
三日為攝政准宮宣台

弄

忠仁公例良房様おの例とあて
馬と川中後代よ其例と用り事
良房公の時此中ハ取見しは
たろやろふよそり至ゆ之一部

弄

或あて馬と白馬と也事あるはまて

白きといひて何まありよ白き物ハ青
くゆりぬ七日前會とハ青馬節會
ト云礼記文も馬馬ハ一勅
をらぬれ日ハ内乃き一れとるり一て
昔乃たぬ一少を事一とて

^表四れ後式とるつとハ何とるといひよ
左る家敷ハ下供をさる後式とる
一ころや昔れまのハ事とる
ぬはり一少のせとれ時の例を

礼事とハ此く一少何れとる

為

^{キサラキ}二月乃サヨ日朱蔭院ハ初年あり

^ハ御記云延喜十八年二月廿六日己巳是
日桑入六条院云

此月乃例ハ凡儀ハ天曆二年正月
康保二年十月廿三日西度例殊お針
表 亦父子と時行幸上皇宮例

天長十一年正月二日仁明天皇幸海和
院

見國史

元慶十年正月四日村上天皇幸朱雀院但
母后御同宿謁太后于柏殿 見孝子王記

其後度々幸北所柳菟山院清涼寺
八年五月行幸後深草院清涼寺長壽堂之
時有沙汰為中門下清涼如朝親行幸被

秘 追天長本例云

仙洞一乃行幸八五年朝親行幸
とて何々の父子れ此所の幸く之程見

才として御まゝのゆよいくと之程探の
卷よまままといまのまよふてな
との行りせとまうとけり程ん
冷泉院ハ幸雀院の此猶みみられ
書 仙洞一乃行幸中右のりて
乃事なりと

秘 故宮の山忌朝

病やま忌月音よらむ一 春日
或はまくつらとあまのつと唐ハ長月

ナリテ忌日ナリ有日本ニハ正月忌日（忌）

因忌解又ハキリクワト云シ

今之礼何と色ヨシク々々ねと云行み
かといあう色これいう身もはりたり
ももめいいてまのりまお好し何り
色と云きこのまハ

何保元内宴有沙汰法性寺用白被著并
色袍之由見松殿託櫻下龍衣事而ハ
普通ニ裏ハ櫻ノハ幡臨時冬日主上令

著櫻下龍衣同半臂給或又時ノ行幸

ナトモ春ハ公卿著櫻或崩木龍衣（深）

（表束）

晴儀諸臣著麴塵袍一日之當色也
其時主上令著色沛袍給亦一人會志
之

漢代曆大唐景雲三年 孝 正月五日
外武官各加階及天下老人与板授官
年九十已上老与緋袍牙笏

西宮記之内宴之日臣下皆麴塵主上服
赤赤色而才一上御服同色之袍是前
有雜例之中故自信公並小野宮大上度
著赤色但延壽之間國經大納言時
赤色マツウロセト云ハ地赤キ文星
袍

秘
内宴口主上并才一公卿著赤色又
賭弓時如此見西宮抄青色袍下襲
ハ櫻カサ子或朽葉リ著スル

秘
リリ色ハ麴塵之考リ何の色ハ
乃晴レ日ハ才一の公ハ主上同色リ
著スル

弁
一勅青色ハ麴塵と云是等と今ハ極簡
乃ミヨリ袍ハ赤色ハあり候と
青色ヨリハあり色ハ赤色ハ
分ハキメ

みかしの御衣
みかしの御衣

院といたまきいりし

秘 朱産院

ちぬかきりふかふた

うばくしういんりのゆれ

ふらふらと文人 秘 拜日

秘 きこしりふり作又とハるま

その所かーうーときこしるふか学生十

人ともす

秘 学生とハし日及才とくふ人とも

拜

一勅文人ハ儒者ノ学生ハし日及才と

ふ人ともすこれかうりし

式り乃ばふこころこれ題とすうへて

ふいふ大教の太師君のころあがり

ふいふゆらあり

秘 延長四年七月九日御託口去月廿五日

部有試判文其判及才者三人登者

託口康保二年十月廿三日行幸朱産院

御題於院人不被行也

是葉共舟涯怪兒 朝之言 澄陵水興膺乃

才人一人橋緯平字板宣 或戸也 元潭字是捕

藤原雅枝獻策并散王 村上清回

是亦其例也

秘 執題といふこと

秘 清前試よ執題といふハ後志和康

保土の例あり又堀川院寛治元年

秘 羽敏行奉よ福下 執題有進試

秘 右敏のたらし君ハ夕常

とくうと少物ともハ

秘 腰病といふ

水原抄云とくありと物といふは

四つとものなりとくありと物といふ

多し奥なるれ或云奥義といふあり

とくありれんれ 執文

今葉腰病甚者れる慢りといふ

高しとくといふといふはけ夫あり

せれといふといふといふはけ夫あり

此方ありあはれとして他よりこれなり

中流の試よ六行なりし今高量

秘 其よりぬききいし多きけしなり

故流の作文として中流の試よあり

取よりて初と作し多きけしなり

自然人は決合なりとせしれ用

唐物あり進士と試りよ六人か

何 故鴻試事

孝養院試よ六学生皆舟よ京

流に初て初と作し文章生試よ

或る有して初と作し初と試し

今日孝養院よてら初と

ふりかたの初流云すふ試の試給

りして初と作し初よのきりて

利初ありありきり初と初と

て方略の宣方なり

かきく支道ありて

夕霧の巻

秘

至あつさりしとせしむるは

とおぼしき

去葛精まよほし

院のみかた又さきより此事

秘

後よりといふつふのみこと

秘

花鳥の此院のみことと桐葉と

花のやまはかり 草花院とては

昔のむすめとてさるゝ出り

秘

花鳥あれ半しよと去葛精と

とありし出り

これより事いふれはあり

草花よかありしはゆりしよとて

相成門の御時り事いふれは

おし院ふりしはあり

弁 此所よりさうりのみをいへ一節

原 うらひとて風を吹かえつるまはむいにてはら
まうたのうけさうはらり

秘 今日此書物かかるといふはしつて

一とハ相違のみとていふはむいにてはらり

何は標 書物の端なるかたはむいにてはらり

とありは何とていふはむいにてはらり

牛丸 ぶくくと書かへてつるまはむいにてはらり

はむいにてはらり

秘 洞中よりさうりのみをいへ今日乃り

存にて書かへりてはらり

脚乃みことときこし

秘 螢の光りてはらり

何 六条院の書物 若菜書よ杖風集

舞人伝

いませうよはらりけ 主上よい冷し

考の文 いわへて吹かへるみはりてはらり

多れはらりてはらり

弄

世と親しむゆへにわが世はわが世

養育しむるはわが世

秘

唐堯より孔子をばえりては

代と親しむるは

あきやうに

親と親しむるは

うせのひて

主上の益とせむるは

^{主上}うせのひてはわが世の益とせむるは

わが世の益とせむるは

わが世の益とせむるは

よき世とせむるは

わが世の益とせむるは

主上の益とせむるは

わが世の益とせむるは

秘

是はわが世の益とせむるは

わが世の益とせむるは

とんりり又かきかきしむりりしあし
 うあしめさぬとんりりしあし
 まされんてあしにあしよしあし
 かしあししあし
 ぐあしとんりりてあしあしあしあし
 あしあしとめとあしあしあしあし
 えんあしあしあしあしあしあし
 ましあしあしあしあしあしあし

何 李王託曰天曆二年二月九日唐德之

同樂所願遠送送音不分明詔在天下
 法者近復夏元在大臣奏之上皇人令
 尚書寮所琴式之相琴余琴在
 為持琵琶治部之兼高明名唱歌者
 教人復南欄

何 安名尊催馬王櫻人日
 あしあしとあしあしあしあしあし

たし^龍 所^一 一^そ 一^わ 一^河 一^の 一^ま 一^か 一^ま
の^め 一^り 一^と 一^ま 一^龍 一^あ 一^り 一^ら 一^う 一^こ 一^う 一^ま 一^ま
れ^ら 一^う 一^と 一^ま

唱歌殿上人

因

操人^一 一^の 一^事 一^終 一^つ 一^こ 一^の 一^り 一^り
一^の 一^神 一^叶 一^{あり}

たり^一 一^と 一^ぬ 一^れ 一^と 一^り 一^に 一^さ 一^う 一^う 一^こ 一^の 一^巻 一^と

て

何

同封^一 一^奉 一^之 一^日 一^已 一^臨 一^氏 一^日 一^主 一^殿 一^奉 一^供 一^庭

燎^一 一^之 一^由 一^見 一^同 一^記

お^月 一^さ 一^い 一^乃 一^交

秘

孝^一 一^崔 一^院 一^の 一^母 一^后

か^一 一^に 一^ま 一^つ 一^つ 一^せ 一^ま 一^ふ

私

何^一 一^海 一^を 一^有 一^塔 一^々 一^一 一^後 一^と 一^{あり}

何

拓^一 一^梁 一^殿 一^を 一^孝 一^崔 一^院 ^{良角} 一^東 一^宮 一^故 一^事 一^云

彼^一 一^宮 一^有 一^素 一^拓 一^局 一^座 一^を 一^北 一^故 一^に 一^拓 一^殿 一^後

宮^一 一^中 一^を 一^不 一^く 一^由 一^見 一^九 一^条 一^右 一^承 一^相 一^託

を

拓^一 一^庭 一^八 一^漢 一^氏 一^帝 一^拓 一^梁 一^殿 一^を 一^一 一^と 一^り 一^交

慶十年正月尊德院行幸謁太后于
柞殿し由見奉り王記

おころりんとす

主上乃由信子源氏よりひまを
きしゆれ約よりこしひまひて

太后の行幸と候新しき
ゆへに色行よけり

太后の由さるし

右宮と思ひて

主上乃由信子源氏と云ふ
よりこし又信の心れき

かうきくたうしきひぬくし

秘

主上の由信かやうしきありて
らうきよぬらひゆりけり物と
舊やれ由事と云ふく思ひ
せ

いまはくしありぬるよりひま

私
後の初

よりこのまゝに

ひののまゝいふは夏のやうなる

只今の御存じ申す中へ昔事と

思ひ出さうとてなまらぬ

はるくふりけとを

秘 授政太政大臣相を置れ事なりし

たしとて家へまはり

秘 只この御力をしるるは

さうりや

后を親しむらあり

太后れ御中へいふさうりやんと

ふまて太后の心を察して

免名なり御

在政多しらのまゝいふとせ

因 主上 令乃事と太后の思ふと云

内ゆれ人の存

脱月事

れをりておりては況と云る

わがひのよゆにほれぬ事ありとれ
思ひまよへり

いほもれはつとくふりあり

秘 うれしかりは皆事なり此

后おのちまをたそりせさをあまふ事あり時を
あまうとありれつとさかりありたにれは
うれつはなよふまらぬ時

后よつとさり年官の爵ありは事や
さやうれ事のなほよふまらぬ時今

ふかやうくむり 高や如虎のほは
いあふり河くまほひ事とらう
へさぬかりはめめくむらりい教積
うきやういさことありとおいす

河津給年官の爵

たいておのりまにゆりなまはゆりて

秘 老ひりしあひあり

誠知老共風情少見此年元一句詩

院もくく内り

五十六

年産)

長此洞松風堂しきほり人の様塔より
くうきいんや

礼何しきとよしきとほつらふら
あまきいあり

大いこの名をれ日かこらばくり
て進士ふらり行ぬ後よりほつらふら
ふりゆととえり世行り
よりい三人あん何りけり

秘

依又ハ得たりつらふらかり
横入りゆりき生るい進士しあり
なるり代々儒者の家い今い
と子い

并

一勅秀文いかりかりい進士し
必しそかりりれかりし
つをゆ

四王

礼記曰大樂正論進士之者以告王
而辨イニ諸司馬曰進士註曰可進受爵祿也

聖武天皇神龜年始進士試 帝王系圖

進士乃弟例

承和六年春皇若連珠詩女捕右原乃弟

三人三月廿日判書孫王茂世王桓武後仲三原氏宗下

承道 文長河

登科記之式乃卿是忠親王二男進士乃弟式

瞻王延壽十六年八月廿八日試行幸朱御題

高風送秋詩以鐘為句乃弟四人九月廿日判

友原高樹字友原童大江維時字大江三春則

規字朝藤原春房字春房已上四人不作用

白乃弟

多三人乃人

秘夕乃弟中

扶才乃乃さめ 以加乃乃乃て約原乃乃

乃乃

何正躬王葛野親王男弘仁七年補文章生天長

八年十一月二日任侍從

源清平是忠親王男延壽二年九月文章生

年九月廿日侍從源保充代明親王 天曆四

年十二月廿日奉文章生試同五年遂年十

年正月一日侍從

因延喜源克例云可尋

此始の京宿途同より身付侍從

うみ人の由事

や并居の事一 花日

おそ乃せらよ

大殿よりうなり山とゆわん

くむれい今もそりともこの奉武の女

たあうもくまぬぬよくの好く

おら乃よのたや一 や

申交行答るるの遠々の例もあつ

とぬよぬいゆり

おさ或 らく志のひ 契下にあん

姫妻のりとりけいし

とぬいもろのこみ

いづろりんさるるも

秋好の由詞何とてあはれなるは
海よりやうも後代に例なきごとく
しる海はさふらむて軒窓を
ゆきまて中へつとれぬく
このまじ

此れはひまの西をさひ

中宮の由命に新地へ

むもあはれをさるる

源乃志のまゝに解果昌くり

きしはひ 中文は

明名婚若る

は若乃 明名よ

人の物りいし 海のまゝある

く海ありのまゝいし

装束より業へ

より一さの八命り此事

大なるのまゝにありは

兼也とるる

よき事の中くしものふもものひさ
てれぬるうれん大いりりとも
とて

吾宮乃西人あくはよ目のかたは人
ありまか

^矣東薩院西子今上明之宮小一果の

西中より元二劫 遷標巻 了見

松吾宮乃元勝十と白二月お例二劫く

人のしとわしとてか、もくしとてき 競糸

ころ互れおひささうと

思萌 さひうじうとるまのりて
萌 さひうじう

源氏代姫君女御あうあふさうに
あぬ人のあしとてはる

縁しつらうし

たれむ

乞ハ藩京女也仰り又とんさう白人
れ別人れ可う見梅枝た大臣不入
系因たたおは巻りしみてて未よ見
えんもの梅思たたれそ此れたれ也
栄花物語云 冷泉 東宮り末薩院の
姫文もいふはつはつはつあわりのたれ
女仰りせんときしんしんまふん

いさしうまのむらりしんりひさり

^矣梅う枝りたる府へ系焉、別枝程り
た大臣女御と曰人れ別人れこれと
是るものあうたれは冷泉へて

たれむ

^矣はたお系焉、う

和河海へ梅思此時たたれ也
但しうし大臣將れは人れ別人

いさひくしき

深の初し 夢あつちうしきゆめいん

せん事しゆてんちん作也

まはりくしきあまうこつ中

深の初しきゆめいん

いさひくしきあまうこつ中

いさひくしきあまうこつ中

いさひくしきあまうこつ中

いさひくしき

還迹やうくれういん花き巻り

着茶上巻也あり

いさひくしきあまうこつ中

いさひくしきあまうこつ中

いさひくしきあまうこつ中

いさひくしき

明石此始君角延りありて寄物

いさひくしきあまうこつ中

いさひくしきあまうこつ中

くはさくよ桑せんよ延川
はつゆくとく深氏姑はつとまら
はるは乃女入内へ
まのけいんとまら

藤原殿女御

梅枝乃らち乃女とく

ころはさは 秘 明石中宮へ 矣

しーのゆとの井乃志事つと

は 淑景舎 初重 深氏乃母乃長深氏代と

曹司ちりし一船也

あつたあ志つてひそくはまつみのひわらく
さうは乃乃西志つてひそくはまつて
さそ入内はひそく

まのけいもゆりまら

秘 申一宮也

宮ハ志事つてひそくはまつてひそく

ラブキ 四月 は 母とはつたあつて

四月入若子宮例

陽明門流万壽四年四月廿二日合子
宮年十五長元十年二月十二日為中宮
業しく以後例花柳為洞父花柳

此てしともとあるより

以洞交りしよりあゆ人志くら
給之

物の志くらあや

洞交れらるあや志くらより
源り見つくりひきき

此りしのはら入つてはしとてはや

てなりしとてあつては

茶子速 ^は ちやとてあつて

寝る北立二階一脚と東置櫛匣一

双そ下置音無匣と下階置茶匣

いし ^は のみ ^は 何 ^は 無 ^は 上 ^は 際

古筆のとくれりしとてあつて

あや

よちのあや ^は けり ^は けり ^は けり ^は けり

ありし世乃末多しと人々は之を以て
乃世の末多しと云ふなり

世の上よ源氏と云ふは河のほとりなり

河海よりと云ふなり

半の世乃彼名弘法大師也之を以て彼名
如日本紀万葉集と云書極て日本紀彼
名と彼名と云ふ万葉集の音と訓と
を書く

江談云天仁二年八月日向小一桑亭言

談云次同曰彼名日本何時始起乎又何
人而作之答曰弘法大師所作之也
事無一不見但古后自筆一彼名法華經
信書之時被新法論論師南小英也
相逆為通守仰高若清範慶祚也一輩
者振富樓那之并也後源信信於又
勅此事説云日本國誠一雖為業一合云
唯以彼名可奉書也弘法大師云傳習法
真言梵字悉日雲木密法一後等曰教法

作イロハニホトノ讀シ給業一切法門聖
教史書經傳不離此讀史字イロハノ字
ハ色白ト云心アリノ不説他事只以此一事
令誦人皆驚耳ノ由取傳因也古人曰
記中有此イロハ又曰然者何弘法大
師御時以性無僧若此日中紀中僧若日
本紀有之由息外令見如何答云此事
在理之雖然只付傳言令書也イロハニ
者彼時始此之一説伊呂波有三段イロハ

ニホト子リヌルノ大安寺護命僧正作
ワカヨヲレソエヒモセスニテ弘法大師作京
或説慈覺大師又云イロハトハ母ノ字也
妙者梵字ノ字母此イロハ之性古和語
ハ万葉書日本紀奇撰書イロハ之

掌中曆云 高岩能書

曉城天皇 弘法大師 敏行少將

長秋 大内記

前中書王 菊明道風 重元 作理 大貳

後中書 具平 行成 傳後大細云

ありき 阿のほろま

若の志行 榮つりし今此や

ふよおしきこふやよりて

卯よりてふ末し 如てまふれ 或人

云年よりて

あよりて 奥く 昔はより

よりい 卯く 息く ちりての

かよりて 占古とあよりて

卯よりて 二禱 日記 末よりて

とこ 外 家の 卯よ 今乃 世の

ありし あり 但又 末の 卯よ 合ては

若れ 若れ と 卯よ

若より け 卯よ 卯よ

書い 卯よ

女シナと 卯よ

秘 今の 卯よ

つづの物終云うそのまゝいへま
はらまゝいへま
まゝいへま

いへまゝいへま
わあゝいへま

中宮の母いへま

折ぬり母いへま

いへまゝいへま

いへまゝいへま

いへまゝいへま

ねえ
いへま
いへま
いへま

いへまゝいへま

いへまゝいへま

いへまゝいへま

いへまゝいへま

いへまゝいへま

いへまゝいへま

いへまゝいへま

いへまゝいへま

いへまゝいへま

まゝのうらなひつゝうらなひつゝ
枯好中まといふはなはな
けふのうらなひつゝうらなひつゝ
海のものに後梅はなはな
事よそふらなひつゝうらなひつゝ
んゆつたふらなひつゝうらなひつゝ
ゆきものゆきつゝうらなひつゝ
えれとゆきつゝうらなひつゝ
まゝのうらなひつゝうらなひつゝ

まゝのうらなひつゝうらなひつゝ
枯好中まといふはなはな
ゆきものゆきつゝうらなひつゝ
えれとゆきつゝうらなひつゝ
まゝのうらなひつゝうらなひつゝ
けふのうらなひつゝうらなひつゝ
すうのうらなひつゝうらなひつゝ
うらなひつゝうらなひつゝ
まゝのうらなひつゝうらなひつゝ

のうきく

入るまは

為中女虎(才

あしは

しよ

し

契

は

秘

は

律見

才

は

才

は

才

は

は

は

は

は

院乃内侍

秘

は

は

あ

わ
そわれてゐすきしそわれいふ神は
或これいふは

あまのり筆のさうらうはゆせて正神
うらぬまうと乃ひまうさうらう

さあありともかの君も 母 勝月長く

さあありともい難いありとも今世の
あまのり

前女院と 母 物か乃女院く

あまのり 母 世よとく

花
は一版の世よとく 母 物か乃女院く
うらぬ細い世よとくのま

ねは三人あつめの女よとく 母 物か
ゆめ

これ教 母 世よの詞

まうしゆわとくは教あい入るは
和くわ 母 世よ

いさうま 母 世よ
とく 母 世よ

うゝ子とて

秘 源乃初と終と博と一治とを以て 梨園

とよみさの始と終と子とを以て

ソノ道ノ回を以て

ふゝやうの終とを以て

秘 じくやうの終とを以て

まんみれきとんらほとにるゝとを以て

みれりゝとを以て

ま若ハ文字者ハ 假名文字つひに

いねとハ終らふなりとて あり

葉とま若ハ文字の終とを以て

也假名ハ一と書みとて

ま若ハ文字者ハ

秘 せんまの終とを以て

葉とま若ハ文字の終とを以て

とよとまの終とを以て

秘 大いれみ字とを以て

河苑乃天義りつとを以て

れは世よりのことと保氏にあらざるも
ありやとありとあるをばしるは
く人ありてあるは世よりのこと
人の彼名よりあるとありて捨毫
ありて世よりのことありて

まゝかぬはりしとほくくくして

れひもあし

弟子此統不實行可了簡

一説云弟子と統めてさうは

業は以下よりなりはるし

責むのちくともさうある

とて弟子連れ加へる

巻物とて弟子とては

内典ありても巻物一巻中

外延ありても物も何本あり

昔もまたおの昔

秘 昔もまたおの昔 いたる昔不入糸図 矣

いたる昔何人年より川入古石あり

ふつふつとひひと

秘一双

見つゝと源へ

秘 一雙 弟子二指へ

屏風のふつとひひと二枚へ

きつゝとひひとひひと

いばすつとひひとひひと

つとひひとひひとひひと

よつとひひと

えやんおの昔れつとひひと

えやん

私それの源のつとひひと

えやんおの昔れつとひひと

はつとひひとひひと

もつとひひとひひと

かめつとひひと

とれがめ

とてあてらるるいさくさういさく

是の海の子はまきくさくさく

とくせはくさくさく(清名とくさく)

まきくさくさく

まきくさくさく

姫君の御書は能書紙にひら

とるんぬりくさく

かうさくさく

まきくさくさく

とれがめ

覆申

とれがめ

とれがめ

とれがめ

河島藤紙

宰相中納言式部左衛門尉

夏の中納言

宰相中ぬり音 以中将 柳本

秘 昔中宿の若ら先の先中へ

河先帝或式名又力もく

あいでうこぶ

む

河一は此又葉の葉此葉の中又字
とくくあり石多きと此ははとてい

中宿和尙此河の葉とてい又字

此祈禱の葉とてい何らりてい

或

或注はあててい葉とてい下後り

書又字とていとてい也 奇は後とてい

やとてい葉とていりていとてい

揚とてい中とていあよの荷とてい

也とてい

史

河一てい後此中とてい又字ははとてい

とてい物とてい 也は注せり

まきの志ん夜よ

^秘 ぬき物ありせぬし取らりし例
しり矣

むさしりるくあさみかり

三月れ末、四月れくしりりり

りりれとされもあても

きりい事くぬも今れせの飯名

うれとん所ノ字れ

しりありあつさ志ん

新乃集 白氏入集うとれ

いぬきやうしえりりりりり

西あまはれやぬ二人の女房にきれ

うらひりよあましりりりりり

くらあしりりり

二三人えりりりりりりりりり

やれりり

けりりりりりりりりりりりり

若ハ机るしりりりりりりりり

るりしよ

筆はあつらひ

思ふとわらわらわら

あつらひきりきり

^り揚屋 ひの枝

^秘万葉、枚浦枚湖とありけし字

あつらひきりきり

ひの枝

ねまひの字は

物まひの枝

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

秘

深ハ前より菌と云は流るる

とてとくもせ給ふなり

これ富しといふ事

富貴なるは深なるをいふ

深なるなり

うらうらこもりていふ事なり

なり

今世の時宜くありて志給ふ事

ついでに

秘
深乃親

か乃深ししりせしてなり

ついでに

弟子と持来ありて 安弟中化

とく進んでありてなり

不惑く 深乃ありてなり

昔より深乃ありてなり

昔より深乃ありてなり

深乃ありてなり

深乃ありてなり

奇しきしつゝのさうらうとていふ

風流めさうらうとていふとていふ
あゝぬ方乃にまゝしとていふ
とていふとていふとていふ

多しとていふとていふ

方一肩とていふとていふ
又しつゝしとていふとていふ
お遠くとていふとていふ

奇しきとていふとていふ

又字とていふとていふ

かうとていふとていふ

かうとていふ

しつゝとていふとていふ

班超投筆硯歎曰大丈夫當立切石

異域の取討候安能久事筆硯同字

今葉等とていふとていふ

しつゝとていふとていふ

或班超の拾文好武義とていふ

一宮乃多岐乃川一其れハ源氏ハ
其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

加ハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ其れハ源氏ハ

おまがくらす

黄ナクミハクミクミ次と早トセ宮ノ詞
よりよこいよやうなふとも縁なきのあくい
いさ〜ゆ〜とれあ

いふ事なほくまひり

かきぬくつあししゝの

海のさしぬくつあしし

いふ事なほくまひり

源れとる言みぬくのしとる源れ
いふ事なほくまひり

のさしぬくつあしし

いふ事なほくまひり

いふ事なほくまひり

かきのさしぬくつあしし

いふ事なほくまひり

ここのさしぬくつあしし

いふ事なほくまひり

いふ事なほくまひり

いふ事なほくまひり

いふ事なほくまひり

いふ事なほくまひり

むらうの女よの波を

ふらふらうく

ねけあやまわうあまの

御のゆき

うらうらうらうらう

寂媚

私乞も御のゆき

ねふしうらう女

海の名よき始つる海と

見ゆ人乃海と水とさうらふれを

らして

覆麟

二夕涙と筆俱

自氏文集

中務集

あはれ人乃うらうらうあま水とさうらふ

ねふしれあれわうれ

覆麟乃一白は乞とく人れ海と云ん

ゆふ人の海とさうらふ人れ感

うらうらうあまのゆきとさうらふ

ねけあやまわうあまの

御のゆき

と申すは烟とるもて之を

又これんや乃志

^{紙屋} 色紙

これよりいふ可くともてはゆきて
みまはるる

文字は志新第之新より志新第し

て人れはる新行のありく新第

志新第のい中第乃字新第は

徳く強芝字伯英名第書絶妙時人

謂臨池水 畫思 後漢書 四張生と草

聖と号と

志新第のあり

うしとてとる名のうするる

いささかれん志新第のあり

あつたつと

りては見えあつたあつた

乃ありと

ありとありとありとありと

たまの香のこころ

ちよきまのうらみとほくろひのこころ

しきあつたれ

あてれとてしきあつたれ

りくろひのこころ

我のよふまにせらるる心よ

弟正一とてしきあつたれ

あつたれ

弟正一とてしきあつたれ

多分のよふまにせらるる心よ

うさあつたれ

異様五ノ弟

女のいふかみ

女のいふかみとてしきあつたれ

女流のいふかみ

権のいふかみとてしきあつたれ

宰お中納のい

夕暮

ちよりのうらみかひて

華子やういふやうな文字も

このまじり難波浦と云ふや

りやういふまゝのまじり

^の文字振石

ふれは是れ一のまじりやう

あれはとゆふま

ひまのいろくま

けしめて給

^の興感メテ 日本紀

何れも物あり

是より書きたるものなり

字も又ふれやう

一日の書物の批判ありけうなまじり

さぬくれつきこのかんともえり

^の續紙 巻物

秘 ありさうなまじり

御子れ物候し

秘 告部なまじり

文よさうしう

雲の本とさういせぬん

既成のみとこれ古万葉集と云ふひ
くせぬつり回事

ねえさうれんくこの古れ字二集家
此記鳥ぬれぬてしうしうと云ふ

予史書云さうのみよのゆりさ万葉集
と御若しう記してはよゆりさこといよ

めとしうしうつとつあはさうり又或抄

よ古万葉古ノ字ニユト点セリ契訖

古万葉集と書くと同云しあし一の

万葉しふ義れ一各合点と云古

イニし一ト云と又字よとと来りて今古

万葉集とよとつとらぬ

笑山ノ然ト云
行ニ付紙アリ

6

万葉集十卷聖武御代撰く或説よ

万葉抄五卷貫く撰く乞以後撰也

花

百葉一ノ七卷平城天皇詔侍臣撰
し見右今序又百葉抄五卷一説紀
費く撰く一説梨臺五人抄之同七卷
抄不知撰者以外嵯峨御撰曰卷四六中
不見但ふかりしき撰定乃抄めて
いふくそふ中のみありしをくえいひか
せ給ふるやうなぬへ

は

吹集云天曆五年宣旨ありてりや
大和のえぬぬ不御壺よとせ給ふ

古万葉集よとせとせとせとせ給ふりし

とがしあきかひ河内祿清原元輔近

江孫紀時文學生源吹抄書不取坂上

中城いた迫少将蘇原朝臣伊尹と

ひ不此別高し定ふや給ふ

紅

古万葉集 嵯峨天皇此ふ中

此ふあよふ紙撰してとせ給ふ如七

百葉全了めていふと給ふ

延喜此みくろ古今集と

^ひ延喜此代は撰せしれらる和言集と

まはとれらる震書とあるにたり

向しといひしれらるあまのりり

かろあまのりりあまのりり

久れこまもじのりりあまのりり

こまのりりあまのりり

^ひ唐組入

唐法縹紙

綺表紙

玉抽

^{カニノカラクニノヒモイ}淡者組紐たんろく

^美たんろくくもはくろみ

^秘啄木ノ類

^秘あまのりりあまのりり

神のりり

向しといひしれらるあまのりり

^ら昔はあまのりりあまのりり

玉義之、あまのりりあまのりり

あまのりりあまのりり

おんあまみ

灯さるるさきさきあつとち

くみま

切灯をりりりりり

つぎせぬ物れ

全書乃凡情とあれりれり

こりろのりりりりり

当世れりりりりり

あし

やうてこれいさあさそりりり

深へまらりりりり

とんちんちんちんちんちん

あまみあまみあまみあまみ

あまみあまみあまみあまみ

あまみあまみあまみあまみ

あまみあまみあまみあまみ

あまみあまみあまみあまみ

あまみあまみあまみあまみ

ゆきあふあれより後より一人より
ついでに女よの女よれいかくの
ついでにかくの女

^秘 源氏の也能く

かくの女ハ唐女の書籍也

いふくさこぬえん

高麗笛 名物なり

かくとむねと上中下れくも

それよ似合なり物とかが

倉んとむね

内大ねのこえ西のそと

内大臣は時に入内するを

西のそとありて井此を

ハタ音の出入り内

ハタ音の出入り内

ひめ君れありて

^秘 音名

あさ

^ら 指

松

い字

ついでに

雪井宿も物さひゆき

かの人此西書契夕音人

夕音人さくんでれま事

心くさくさ

内府のくさくさ

人志

人さくさ梅あ

一くさくさ

夕音れさくりにえい

結さゆえ

人れさくさえれい

かすくさ

内本居のくさくさ

さくさ

あつくさ

内大臣れあさり

夕音れさくさ

さくさ

きんりにけりさぬめ

人よあひうけつていふは実かぬ

あつれあつれ

ありぬやうてあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれ

六位とせしむる事なり

あつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれ

源氏とせしむる事なり

あつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれ

物しきえぬわたりこまりくつるはめて
夕音のせきおよびのそとへ懸動り
しそわたり

かやうはういへるはな

是より源氏乃夕音は教訓し給ふ
事くししきと四つ入る源氏此む
しはなうたのみと此はなうたの
事成ちる出し給ふ

源氏の父人しはなをいふも

あつらぬ事くしはなをいふ
源氏よりこまやうにはなをいふ
事く

源氏とちる志うらうのく相重れ此門の
西教訓もわか極のうら志うら
るるしは

しそわたりけしは

しそわたりせんしは

今あつらぬすあうしはなをいふ

西門乃原のしりし母とては時をさすし
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
せりや

くくくくくくくくくくく

ク魯ル汝ル流ル終ルいルくルあルいルくルくル
或くくくくくくくくくくくくくくくく

たりやルあルくルくルくルくルくルくルくル
くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

宿世トくル物クあルいルくルくルくルくル
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく
秘くくくくくくくくくくく

あらぬ...
あし後...
...
私...
の...
後...
...
...
...
あり...

い...

海...
み...

...
...
...
...
...

...
...
...

秘法位より程の身りらとせつ
柳合るるは

契

信のあふさ町を退り他より
あふさ町あり

心とのほりつらうあま

心乃奢人

ふいふのむらさきさつひる時

契

一人よさるるは

女はしるあふさ町あり

内々

秘

は後神勝りは

海よ見

契

は久長時卒る

又世継天曆事何

巧

丞相歎以贖子罪陽石汚向云

撰西京賦丞相云法賀子教聲

よはせふ又丞相杉あり

時陽凌の東安世系師賦使也

あす安せうけてうら海^{コシノテ}奉せりて
内よ公孫賀安世とてうらへてなりとも
あつら貴とてわらあつらう時よ致聲と
あつらて安世と禁せう海安世獄中
あつらあさもひいてうら南山北竹
斜舌の本あつら公孫賀うらひせり
うらうと致聲わらうりのあつらうに
湯石公主武帝女と汚うら書と
うらうてうらうらう武帝怒て父子
公孫

賀致聲とて小傳をう海漢書うらう

えうらう

寛平乃遠城小た出物^{時年} 先年於
女事有取失とありありはせり
或抄之^取其経乃^取いりてあふ女事
定文うらひてわらうと時年此か
とらうとてうらうと海うを始とて
わらうて定文うらうらうらうら
とらうら母よんせうらうらうら

乃ん始てはは女成定よりとくせう松り
と形へ時年たにわが人のとせうあや
まうりありまうくとまふこ

松浪くあ細言ま極あまよけ海泡せう
世絶よ天曆のみよと安子中又う女始
て西まけさしあさうあ中しに或る
まの少言のむよりえありとんと院
て西りうとた意達よたうこ中らせえ
らうひふありととまゆし始て世た
政と志をせ始りぬさ海あれのまう今
たうしつまうとさよんけい西ゆあそまう
小形またおとあこれあられ世の
やしよまあそくまううとと君たゆん
此末の世しうとあさこゆたそまて
人乃そしつとそひ始り海さうあま
始とまう 望河海
松云是ハ皇明親王此後宮此入宮の
後登子此尚侍とつと人始りれ

あつまうしと事よらんとはきて人の名を
もつて

は後六条の正島家らとのみ成り
りらてお終へ

うあやまらう

是のいんそめさるん人共あまかあつと
ともさひうへして人悪ん、情
多ふさひ

逢そあけり人成中そつひみさう

やうまはるし

あつまうしと事よらんとはきて人の名を
もつて

末摘歌をそめり源氏の内心いやう

るり人なれとも堪忍とてはくえん

あつ

りはねやう

女はあやめ

ねやう

あつまうしと事よらんとはきて人の名を
もつて

又ハ女レカヤモレシクハウツクハ
ニヤウウツクハニヤウツクハ
此レハトウツクハトウツクハ
ウツクハトウツクハ

ツ井ハトウツクハトウツクハ
自レハトウツクハトウツクハ
んトウツクハトウツクハ
ウツクハトウツクハ

此トヤツにハシキクハ

源乃クツ音トウツクハ
カヤウツクハトウツクハ

ツ音ノハシキクハ
トウツクハトウツクハ

私ツ音ノハシキクハ
トウツクハトウツクハ

女トハシキクハトウツクハ

秘 雲井宿の心様と云ふ内大良也

秘 是の雲井宿の文様と云ふは
秘 孫の事也

久つき見くおかしやう也

あゝ根りふささうと云ふは
下は云ふは云ふは云ふは云ふは
此方或抄史書に載し 奥松平川國之

此方或抄史書に載し

夕香の云ふと云ふは云ふは云ふは
かゝの時節と云ふは云ふは云ふは

幸う海と云ふ

秘 傳と云ふ物と云ふは云ふは云ふは
秘 云ふと云ふは云ふは云ふは云ふは
秘 云ふと云ふは云ふは云ふは云ふは

秘 行りく夕香此云は云は云は云は
秘 云ふと云ふは云ふは云ふは云ふは

ワ 祇とむれじへ入るると
并 川あよくけつりあはる
きり井底のむし

甘^并れらるんうああらに人かむ
父音のみまもともをり井底のむし
とらふむしあむ

中務此あむん

秘 前よらう。中務文り音とじら
とらんむしあむ

大 殿しとゆき一入流りりて

中務文りり流るるやうゆえ

花⁶のりり

後仕た長ゆらりりり父音とじら
今又志らひらむしあむし
とらふ

父音中務宮の四じりりりり
よらうとゆらりり人のやう
志らひらむしあむし

矣

内のおもひを升れ存よけまよ
密にまがらうまをとりあ義との
ひてとみん

ねのそらつれ

源氏をそらつれ終一対致は夫は此
うけひきぬさりし事へ

去りねらふまを

致結のまれもう同を争りしと源の
腹立あそく志物し治やとらふ也

心よりくるひきと

前のおもひと内大臣は今まあまの終
まうん思あうそとそ討らうか
るん一又同を争りし事いひく
多ん終とあくまらうあま

おんを御うまを

秘内大臣始あへし終あ

いとくけしとまをこいしとあく終れ
あかり連

因
内大住乃く此まよふに似し〜
夕音と〜此まよふとあり〜

いふにせし〜
内大住乃をいふまよふとあり〜
〜路ひわたり

内大住乃と〜こらまよふ

あうり〜やうて

比
後江の住人のまよふ〜
〜此まよふとあり〜
〜此まよふとあり〜

あわ〜くのとくれ〜

秘 苑
寄井宿のまよひまよふ〜
秘
移り午か〜

比今やと〜のまよひ〜
内大住のまよひ〜
〜此まよふとあり〜

内大住あり

秘
夕音より此まよふ

さうりにそ

つ〜物〜此まよふにみえ

夕音

つぎるさいつまはは〇よらつとす

まぬくやん〜〜〜

梨

はさるさつとす井底のゆゑは人の

夕音身つ〜〜のや

秘

を井底のつとすまふよれつ〇

あつとゆ〜〜つとすまふよれつ〇

志つひ〜〜つとすまふよれつ〇

〜〜〜〜〜

私を井底のつとすまふよれつ〇

らあ〜〜〜

ん〜〜〜

よのつとすまふよれつ〇

わの類もあ〜〜

字〜〜〜

心

深氏悉れ夕音と〜〜

〜〜〜

あつとゆ〜〜

とあつとゆ〜〜

如
くこもやうるりよまけ中格まよ
方よりしとらうまきあし海一と
かのまきしとらうまきとらうま
しとらうまきとらうまきとらうま
まよ

あつてまきとらうまきと

し人ののまきとらうまきとらうま
らせぬらぬクア音のまきとらうま
まきとらうまきとらうまきとらうま

おの詞。まきとらうまきとらうま
人のまきとらうまきとらうま
まきとらうまきとらうまきとらうま
まきとらうまきとらうまきとらうま

也
也
也

まきとらうまきとらうまきとらうま
まきとらうまきとらうまきとらうま

クア音まきとらうまきとらうま
まきとらうまきとらうまきとらうま
まきとらうまきとらうまきとらうま
まきとらうまきとらうまきとらうま

夕音もせりあひいよとさう
夕音もせりあひいよとさう
夕音もせりあひいよとさう
夕音もせりあひいよとさう
夕音もせりあひいよとさう
夕音もせりあひいよとさう
夕音もせりあひいよとさう
夕音もせりあひいよとさう
夕音もせりあひいよとさう
夕音もせりあひいよとさう

ねんどうあひいよとさう
ねんどうあひいよとさう
ねんどうあひいよとさう
ねんどうあひいよとさう
ねんどうあひいよとさう
ねんどうあひいよとさう
ねんどうあひいよとさう
ねんどうあひいよとさう
ねんどうあひいよとさう
ねんどうあひいよとさう

あや
あや
あや
あや
あや
あや
あや
あや
あや
あや

終句

ひ程中そらふれとさう

此巻のいふりしとりのおはまに
しと夕音のたし不審とい中務交
れりといきりぬらうぬく見たりと
そとの巻此巻の初巻く此と

ねあは源氏の夕音よ志大田中務
あはしとさうらんゆたぬうし
てぬうりゆまのきりぬらぬあ
と夕音たぬうつぬかとい何れ
しぬれ又ゆたぬくといゆ中

持宮たぬのゆこもるとうねよあ
ううううう

夕音たぬよあまぬんやよ
ゆにあかようけてうそあれ
くといまわんあはしといあ
いあまといあれといあま
あといあれといあまといあ
井原のあまよあまぬうう
たあまよあまぬうのあ

方洞へあれと夕音れ 君のまわと
 ありはるありあれいふうらうらと
 かりよるありーまありんをありー
 とひひらうらとくはとくわん
 方始らうらとくはとくわん
 松之うらとくはとくわん
 傾奇のく不守
 一々

弄花 押紙

放書 松

應化三年十二月十六日御即位叙位執筆
 通俊卿記曰東對代南曰間為放書母屋
 并廂東西行横切懸羽屏簾副西障子
 立四尺屏風南北行對座高簾端拈
 大座座絶席五尺 許西方敷之
 為云卿座横切御簾前
 南西敷円座一枚為括改座同日時
 範記

御直序東對放書四之間
十二日放書之間而今
夜依座席換新加之間
西面御簾下格子副立四尺御屏風五帖水
簾去五六尺許少寄東敷共官同座一牧為
當所座南去六尺許敷同同座為執卷
同座



